# 東京農業大学富士畜産農場研修センター

# Training Center at Tokyo University of Agriculture Fuji Zoo Technical Station

# 牧草地に刻まれる円弧

# A circle inscribed in the meadows

所在地：静岡県富士宮市 / Fujinomiya, Shizuoka

用途：大学研修センター、宿泊施設 / Seminar House

構造設計：花輪建築構造設計事務所

設備設計：総合設備計画

構造：RC、一部鉄骨

規模：地上2階

敷地面積：321454.71

建築面積：416.73

延べ床面積：486.23

施工：大成建設横浜支店

竣工：1990.4

掲載：世界の建築家／576、SD9212/82-87、選集1992/110-111、日経アーキテクチュア1990-8-6/149-161

敷地は、富士山の西側の裾野朝霧高原にある同大の広大な教育農場のなかにある。この研修センターは、農場の入口近くに集中する管理施設、研究施設、畜舎等が集まるいわば中心地区の一角に計画されたが、このセンターだけ唯一牧草の標本栽培されていた傾斜地が充てられた。背後には植林された檜の樹林があり、車廻し付近からは樹林越しに富士山が見えるが、樹林に近いこの建物からは富士山が直接のぞめない（今後造園の見直しが予定されている）。また、樹林は農場の敷地境界でもある。

当センターの主な使用目的は留学生、外国人研修生のための研修中の宿泊と教職員と父兄会の保養施設である。そのために宿泊室と共用施設として食堂兼研修室および厨房が要求され、予算の範囲内で最大限の収容数の確保が望まれた。そのため設計はローコストが前提となり、テーマは共用部分の面積を押さえ込んだなかでいかに空間性を獲得するかということになった。

この建物の北西側に畜舎が並び、風向きによってはかなりの悪臭がもたらされるので、宿泊室は原則として南東向き、即ち樹林側に主開口を開く片廊下式の配置が導かれた。また、傾斜地であり、国立公園内の建物の高さ規制から２階建てか平屋が条件となった。

幾度かのエスキースの末、丘陵を走る木製の壁（running wall) がイメージされた。それは、地形に沿って起伏しながら地平の彼方まで続く牧場の垣である。この壁に沿って廊下と各宿泊室が並ぶ。壁に仕切られた北西側はこの中心エリアの裏手に広がる広大な牧草地を象徴し、壁の南東（樹林）側は檜林の足元の湿り気を帯びたひめやかな空間を閉じ込める。これがこの建物の領域構成である。

単調な片廊下型配置は、円弧状に平面形を曲げられ、敷地の傾斜にあわせて建物の床を部屋毎に違えてゆくことによって、視線の複雑なからみあいが織り上げられ、移動に従って視野が移り変わってゆく変化が生まれてきた。この傾斜した廊下を登ったり下ったりするとき、足の裏は地形を感じとる。また、建物を地形にあわせることは、地中梁の成を最少にし、土の移動も最小限にすることができコストダウンにもつながるという副次効果もある。

一方、極座標系は幾何学の拘束が強すぎ、どうしても部分が全て扇型の相似形になり単調になってしまう。そこで、二階は意図的に一階の極座標系をはずした不整形な幾何学を与え、両者を強引に重ね合わせている。二階の形と屋根の分節もズレがあり、この二重のズレが空間にテンションを与えることがもくろまれている。

東京農大２. (建築学会作品撰集）

この建物は、研修センターとはいうものの実質的にはシンプルな宿泊施設と言って良い空間構成である。この計画の特徴はRunning Wallというニックネームに要約されている。Running Wallは直接的には竪羽目板貼りの円弧状の壁を指しているが、象徴的には牧草地の木柵を連想させ、この建物の配置の原理に関わっている。牧草地の木柵は機能的には境界を画することを目的としており、形態的には地形の起伏なりに丘を昇ったり、谷を下ったりするという具合に地形に順応するという二つの特徴を持っている。前者の境界性ということでは、森と草地の境界部分にリニアな形態の建物を置くことによって、南東側に並ぶ宿泊室の窓から手が届く程の距離に森の木々が迫り、あたかも森のなかのコッテージに居るような環境を作り出し、北西側すなわちアプローチ側には明るく開けた空間を作りだしている。同時に、明るく乾いた「草原」と、湿って暗い「森」の境界をこの建物によって強調し、この敷地周辺の二つの対照的な空間の存在を顕在化しているのである。　後者の地形への順応ということでは、宿泊室のレベルを敷地の勾配に合わせて全て違え、斜路の廊下で結んでいる。これによって建物内部に居ても、例えば廊下を歩くときにも敷地の起伏が感じられることになる。外観から言えば、敷地の地形と関係なく建物を置いたときのような人工と自然が対立した風景を作るのではなく、地形に順応し、ときにはそれを強調するという親自然的な風景を作り出している。

東京農大３　　（撰集応募時）

計画の趣旨

与条件

■　敷地：東京農業大学富士畜産農場の入口近くの、管理棟、研究棟等が集まる一角に

敷地が定められた。他の建物の敷地と異なり、この施設の敷地だけが牧草に覆

われた傾斜地となっている。

・南側には樹高約１０ｍほどに成育した檜の植林による樹林が迫っている。

・敷地の北側に畜舎が数棟あり、風向きによっては悪臭があるので主要開口は南

に開ける必要がある。

・国立公園内に位置するため２階以下の高さが条件である。

■　施設の主要用途と構成諸室：当センター主要用途は外国人留学生の研修・宿泊であ

り、その他職員ならびに父兄会の会員のための保養施設も兼ねる。

・そのため、宿泊室（和室２室、洋室８室）、研修室兼食堂、厨房、管理人室、

洗濯室などが要求された。

■　その他：予算内で最大の部屋数の確保が課題とされ、従ってローコストの建物であ

るといことと、供用部分を最小限にすることが要求された。

計画の概要

■　配置、平面計画：

計画の目標

現存の地形、植栽等を極力生かし、地形を必要以上に改変しないこと

（＝ﾗﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟｱｰｷﾃｸﾁｭｱ ）。

最小限の共用空間をローコストの条件のなかで豊かで変化ある空間にすること。

1)檜の樹林に沿ってリニアにかつ円弧状に配置する。

この方針は農場の入口まわりの空間に領域的な新しい構造を与えることで

ある。

・管理棟、研究棟等および当センターで囲まれるゆるやかなエントランスコ

ートを形成するためである。

・敷地周辺はあいまいであるが対照的な性格を持っている。即ち、樹林側の

檜林の湿り気を帯びた暗い空間と広大な牧草地を象徴する明るい草原の空

間である。円弧状の棟をおくことによって、それまでは曖昧であった敷地

の性格が、きわめて対照的な二つの性格をもった場所として仕立て上げら

れる。

2)傾斜地なりに宿泊室のレベルを設定する。

目標で設定したように、現存の地形をなるべく傷めないようにするためで

あるが、根伐り量、地中梁の量を少なくしコストダウンにも繋がる。

・一方、空間的には宿泊室を繋ぐ廊下は地形の傾斜なりのスロープ状になる

。その結、円弧状の平面形とあいまって、果視線の複雑な絡み合いが織り

なされ、廊下を歩くときに体全体で地形の傾斜を感ずることになる。

3)宿泊室を一階に、研修室兼食堂を二階に設ける。

宿泊室では接地性を、唯一のコミュニティスペースである研修室兼食堂で

は眺望性を重視した結果である。また一階と二階は、それぞれの独自性を

確保するために、違った幾何学的秩序をもっており、そのズレが両者を結

ぶ吹き抜けと屋根の形状に現れる。

■　形態・素材

1)木製の柵＝ランニングウオール

宿泊室の北側外壁は木製の竪羽目としている。これは地形に沿って草原を

円弧状に横切るこの壁が、牧草地を延々と走る木製の柵をイメージさせる

からであり、この連想はこの敷地に相応しいと考えた。

2)軽く覆う屋根

「木製の柵＝ランニングウオール」を際立たせるために、二階のボリュー

ムはできるかぎり軽く扱っている。屋根は木製の柵の幾何学性を壊さない

よう、その上に軽く覆っている表現とし、銀白色のガルバリウム鋼板の瓦

棒葺きとした。

■　構造計画

1)一階はＲＣ壁構造、二階は鉄骨造

開口面積が限られ、遮音性、断熱性が要求される宿泊室を収める一階はＲ

Ｃ壁構造としている。これにたいして、一階の構造の幾何学と程度独立し

た架構がなされる二階は計量化をはかるために鉄骨造としている。二階は

また四周の眺望を楽しめるよ開口面積を大きくしているため、この意味か

らも鉄骨造が相応しい。

■　設備計画

1)単純な設備計画

予算の制限等もあり、また使用状況から各所で独立したコントロールがで

きる設備として、エアコン組み込みのガス式クリーンヒーターが選ばれた